

## 【エスタ・ビック(1902-1983)への追悼】 (1983)

### Martha Harris

Mrs.ビックは、1980年に臨床から引退されて以降しばらく健康がすぐれず、記憶力も幾分心もとなくなったため入院しておられたのですが、7月20日にお亡くなりになりました。享年82歳でした。彼女は第二次世界大戦勃発直後、オーストリアからの亡命者の一人として此の地を訪れて以来、親類縁者なぞ誰一人いないこの国が彼女にとってのふるさと(home)となったわけでありませぬ。

彼女は、或る小さなポーランドの村落で伝統的なユダヤ人の両親のもとに誕生しました。それからその勇氣と粘り強さと知力でもって、まったく支援もなしに独力でひたすら更なる教育を目指し続け、最終的にはウィーンでシャーロット・ビューラーの指導下で乳幼児発達研究に携わり、Ph.D.を取得するに至ったのであります。

彼女の結婚は、オーストリアを出国する前に破綻しております。彼女の夫なるひとはスイスへと旅立ってゆきました。彼女にとって唯一人の弟、そして彼女の家族の殆どが強制収容所で命を潰えました。その後多くの歳月を経て、彼女が50代になってようやくに姪が難を逃れてイスラエルの地に生存しているという事実を知ったのであります。

ヌツシャ(Nusia)は、友人たちにそのような愛称で呼ばれていたのですが、この国で最初に出会った人たちとの交流においてとても恵まれていたといえませぬ。彼女はまず最初に、南極探検のヒーローの妹でもあります Violet Oates のお宅に寄宿し、やがて二人はとても親しい友人となります。そしてこの Violet Oates という人物は、Mrs.ビックの最晩年において、彼女の大好きだった祖母、それに精神的活力(strength)ならびに高潔さ(integrity)の源として憧れでもあったメラニー・クラインとも融け合い、その内なる世界においてとても大事な人になっていたものと思われませぬ。それから彼女は、マンチエスターで戦時下の保育所(wartime nursery)に職を得ております。ここでマイケル・バリント(Michael Balint)との分析が始められました。彼女はロンドンで分析的トレーニングを修了しております。この間 Dr. Portia Holmanとともに Middlesex Child Guidanceに勤務しておりました。その後、彼女は【the Tavistock(タヴィストック)】にスタッフとして加わり、やがてジョン・ボウルビー(John Bowlby)とともに1949年には【タヴィストック】の「児童サイコセラピーの訓練コース(the Tavistock training in Child Psychotherapy)」に携わることになったわけでありませぬ。それと並行して、この頃彼女はメラニー・クラインとの分析を始めております。それというのも、【the British Institute of Psychoanalysis】で聴講した彼女のセミナーから大いに感化されるものがあつたからなのであります。

今振り返ってみませぬ、Mrs.ビックは【タヴィストック】に在籍中、その勤務の実態は週に4セッションを越えることはなく、後半ではたった2セッションということではありませぬでしたから、彼女のパーソナリテ

イならびにその訓導がクリニックにどれほど甚大な影響を及ぼしたかを考えますと、これは実に驚くべきことと思われまゝ。彼女とそれにDr. Bowlby の指導のもとに開設されたコースというのは、その当時、そしてその後もしばらくの間、【タヴィストック】内でもthe Health Service(公共医療機関)のなかでも、精神分析的技法を学べる最も徹底したかつ組織だったトレーニングというのが専らの評判でありました。従って、Mrs.ピックに学んだ訓練生たちにして見ますと、彼女のような際立った指導者を得たことは大いなる名誉(privilege)とも感じたのでありますし、それも得てして羨望と批判的になりかねませんでした。また憧れと尊敬を集めたともいえるのであります。

しかしながら、偉大な才能というものは必ずしも外交的手腕を伴わないことがあります。ヌッシャ・ピックは、彼女の生涯を通して、断じて妥協を許さない人でありました。そして、ごく自然な成り行きからして、クライニアン・オリエンテーションに偏するその厳密さゆえに他と火花を散らすことが往々にしてあったといえまゝ。1960年に彼女は、Dr. Bowlbyから【タヴィストック】での研修生のインタークについてこれ以上責任ある立場に就くことをお願いすることはないと申し渡されたとき、クリニックを去ります。自らのプライベートな分析的業務そして【the Institute of Psychoanalysis】での指導に専念することに決めたのであります。しかしながら、実際のところ彼女はそれから引き続き、その後の20年余りにも亘って、児童サイコセラピストたちにご自宅でごく内輪のセミナーを提供し続けたのであります。この期間、彼女は精力的に海外での講演旅行をもなされておられます。スペイン、イタリー、そして南アメリカ、イスラエルそしてスイスといった世界各地を歴訪されました。これらの国々から、さらにはフランス、コモンウェルス、そしてアメリカ合衆国からも、分析家ならびにその志願者(candidates)たちがスーパービジョンを受けに彼女のもとを訪れております。

Mrs.ピックが乳幼児を家庭内で観察することを児童サイコセラピストの訓練の主要プログラムとして導入したことは‘天才的閃き’ともいってよいでしょう。このことから児童分析において、イデオロギーやら理論というよりもむしろ綿密な観察及びそれらの描写に大いに力を傾注することを重んずる伝統が培われることになったのであります。そうした鍛錬は、今や【the British Institute of Psychoanalysis】ではすべての訓練生に対して必修として課されております。それは【タヴィストック】での他のコースにおいても、児童のケア及び教育のさまざまな分野に携わる人々がそうした専門性の向上をめざすべく‘経験から学ぶ’といった一つのメソッドとして用いられております。また過去10年20年の間、ルウエーやらインドといった幾つかの他の国々においても似たような分野で紹介されてまいりまして、国際的にも児童の発達および母子の交流に関して、パーソナリティの成長には情緒的問題点についての理解を必然的に伴うとする見地から、一貫した綿密な観察を経験してみようとする一群の専門職の人々が増えてきたように覗われます。

Mrs.ピックの生涯には熱情(passion)が2つほどありました。精神分析とイスラエルであります。彼女はどちらに対しても大いなる期待を抱いておりましたし、それらのいずれにも実現しそうなほどの高い水準を設けておりましたから、それらに欠陥があることを知って幻滅するのは避けられないことであり

ました。又そうした厳密な基準を彼女自身にも、そしてその著作活動にも当て嵌めていたとも言えます。従ってなかなか滅多なことでは活字にしたがらなかったわけであります。彼女によって書かれた論文、児童分析についてもそして乳幼児観察についてもですが、それらは未来に託されたものであるということでもありますし、これからもそのようなものとして読み継がれてゆくでしょう。しかしながら、彼女とともにした多くの人々にとっては彼女が記憶されるのは著述家としてではなく、むしろ教師としてでありましょう。提示された観察資料をどんなふうにも彼女が賞味したか、そこからどのように顕著な重要点が掌握され、そして彼女によって語られた子どももしくは人物のパーソナリティがどんなにか生き生きとしたものにされていったか…。そうした彼女の能力には人生を熱烈に愛する人たちによってのみ発揮しうるところの詩的な性質が備わっておりました。彼女は、人間のいのちが精神分析によって少しでも進歩するかもしれないというビジョンを抱いておりました。そうした抱負を彼女はその教えにおいて是が非でも伝えたいとの燃えるような熱意があり、それを阻んだり邪魔立てするといった態度に抗しては何ら寛容さを持ち合わせることはありませんでした。彼女の妥協を知らない、時として偏狭ともいえるビジョンは人々の間に敵対意識やら批判を呼んだのも事実であります。しかしその一方で、彼女に備わった高潔さ(integrity)そして啓蒙的な力(illuminating force)は多くの人々、殊に学ぼうとする意欲ある若い人々たちから、滅多にないほどの献身(devotion)と憧憬(admiration)を勝ち得たのであります。

こうして彼女の生涯について、そしてその複雑なパーソナリティについて書き留めましたけれども、この簡単な覚書の印象から彼女があまりにも禁欲的に聞こえるといけませんので、ここでさらに次のことを付け加えましょう。彼女は戯れとか陽気さといったことにはとてもセンスのある人であり、ユダヤ的な冗談が大好きでした。彼女は料理自慢でもあり、自宅でパーティをよく開くことができましたし、その折にパーティ・ゲームも随分と楽しんだものであります。彼女の陽気さについていえば、彼女の生涯の晩年においてはさほど顕著であったとは言えませんが、むしろ健康の衰えた最後の数ヶ月の間に舞い戻ったように覗えました。彼女が暮らしておいでだった高齢者用ホームでは若いスタッフの間でとても人気者になっておられました。そこでの皆さん方は、彼女を勇気がありそして心遣いに溢れた人であると感じておいででしたし、彼女がいかに興味深い人生を送った人のように見えるといったことでとても魅了されていたようなのであります。事実まさにその通りなのであります。彼女はその生涯を賭して心血を注ぎ、分析という専門職(profession)そしてさらには世界をもいっそう豊かな‘場’としてわれわれに遺してくださったものといえましょう。

\*\*\*\*\*

※原典；

ESTHER BICK(1902—1983) by Martha Harris  
Journal of Child Psychotherapy, 1983, Vol. 9

\*\*\*\*\*